

固定電話のあゆみ (1933年～)

1933年(昭和8年)
3号自動式卓上電話機



昭和8年(1933)、送受話器を連結した斬新なスタイルの3号電話機が誕生し、以降いろいろな電話機のスタイルの原形となりました。
以来、わが国の代表的な標準電話機として約30年にわたって活躍することになります。
戦後、電話の復旧に標準電話機の生産が間に合わず、応急処置として、メーカーの私設交換機用在庫の中から標準機と同等の性能のものを購入し使用しました。

1950年(昭和25年)
4号自動式卓上電話機



戦後、従来の3号電話機の性能をさらに上回る新形電話機の研究開発が進められ、昭和25年(1950)性能、デザインともに世界の水準をしのご電話機として、4号電話機が誕生しました。
“ハイ・ファイ電話機”といわれるほど感度が高く、そのためケーブルの細心化にも大きな効果をあげました。
同年、東京・丸の内局などで商用試験を実施、昭和27年(1952)から本格的な4号化が進められました。

1953年(昭和28年)
23号自動式壁掛電話機



昭和25年頃は自動改式当初の2号自動式壁掛電話機が旧形のまま20万台弱使われていました。
しかし、この電話機は、伝送特性が悪く、また、部品材料も旧形のままであったため、昭和28年7月、3号自動式電話機と同一の伝送特性及び品質に改善し、23号自動式電話機として使われました。
昭和34年頃から順次淘汰されていきました。

1962年(昭和37年)
600系自動式卓上電話機



昭和37年3月、東京都下昭島局での商用試験を皮切りに登場した600形電話機は、通話性能と経済性の上で完成された電話機といわれています。
その後、全国的な商用試験を経て、昭和38年から全面的な600形電話機の導入が図られ、昭和46年からは、ホワイト、グレー、グリーン3色によるカラー化も始められました。
ここに通話機能において申し分のない電話機の出現を見ることができました。

1969年(昭和44年)
プッシュホン



コンピュータの開発はデータ通信という新しい通信分野を生み出しました。
こうしたコンピュータと連結できる電話機として、通話以外の機能を持つ新しい電話機“プッシュホン”が誕生しました。
短縮ダイヤルなど従来の電話機のイメージを変える機能を持っていました。
また、昭和47年9月からは、従来のグレーに、ホワイト、グリーン、レッドを加えて4色となりました。

1988年(昭和62年)
ハウディコードレスホン



昭和55年5月、初めて登場したコードレスホンは、普通の電話機が持ち運べるという形のものでした。
レンタル商品としてのみ提供してきたコードレスホンは、昭和62年10月に電波法改正により自由化されたことからお買い上げいただくことができる商品も登場しました。

そして電話は
光コミュニケーションの時代へ...



日本電信電話株式会社

公衆電話のあゆみ (1955年～)

1955年(昭和30年)
5号自動式卓上公衆電話機



昭和30年5月、これまでの料金後納式にかえ、料金前納式公衆電話の設計・検討が始められました。
後納式の場合、硬貨投入は遅れると片通話のまま相手が切ってしまい、さらに相手が出たことによって通話したとみなし、局の度数計が動作し登算されるなどの欠点がありました。
同年12月、料金前納式による5号自動式卓上公衆電話機、5号自動式ボックス公衆電話機が登場しました。

1968年(昭和43年)
大形青公衆電話機



昭和43年、大型赤電話機同様の機能を持つボックス用公衆電話機が登場。
東京、大阪、札幌などで商用試験を終え、同年12月から正式採用されました。
この大型青電話機は、夜間でも使えるように街角や駅前に多く設置され、ボックス内(一部ポール)に取り付けられていました。

1972年(昭和47年)
100円公衆電話機



昭和46年9月から、東京、大阪、名古屋の一部で100円硬貨も使用できる公衆電話が試験的に設置されていましたが、“追加投入の手間がはぶける” “催促音が気にならない” など利用者に好評なため、昭和47年12月から正式に採用されました。
硬貨投入口は10円用と100円用の二つあるほかは、当初外観は大形青公衆電話と同じであったが、正式採用にあたってシンボルカラーは黄色になりました。

1975年(昭和50年)
プッシュ式100円公衆電話機



従来の100円公衆電話の回転ダイヤル部分の代わりに押しボタンダイヤルを取り付けたプッシュ式公衆電話機が昭和50年9月から登場しました。
この電話機は従来の100円公衆電話機と部品の共有化をはかったため形状・大きさ・色彩は同じでした。

1982年(昭和57年)
カード式公衆電話機



昭和57年12月から“テレホンカード”(磁気カードで銀行などのキャッシュカードと同じ大きさ)を使って通話ができる新しい公衆電話機がお目見えしました。
テレホンカードを差し込むだけで通話ができるので、小銭がなくてもかけられ、長距離通話の時でも続けて硬貨を入れなくてもよいという利点がありました。
写真は、硬貨と併用であるが、昭和59年にはテレホンカード専用機も導入されました。

1990年(平成2年)
デジタル公衆電話機



高度・多様化した情報通信に対応するため公衆電話機にも各種の機能が求められるようになりました。
そこで誕生したのがこの電話機で、平成2年3月より使用が開始されました。
デジタル回線を使用するため、通話以外にもファクシミリ、データの送受信などが可能です。
そのため、端末を接続するモジュラージャックが付けられ、また上部にはダイヤル番号などを表示するディスプレイが付けられました。
硬貨とテレホンカードの併用式です。